

審査の結果の要旨

氏名 渡邊福太郎

本論文は、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein 1889-1951) の後期哲学を対象とする教育哲学研究である。

第1章では、言語ゲーム概念に関する主要な解釈を整理し、そのうえで特に、「原初的言語ゲーム」の特徴を明らかにした。子どもが言語を学ぶ際にイニシエートされる原初的言語ゲームが方法的側面と事實的側面をとともにもつ点を指摘した。

第2章では、原初的言語ゲームへのイニシエーションが成立するための諸条件が解明される。その際、後期ウィトゲンシュタインにおける「訓練」概念の教育学的意義が明らかにされ、認知的分業にもとづく訓練によって開始される、他者との関係性に依拠した学習モデルが抽出される。

第3章では「直示的定義のパラドクス」という概念を検討しつつ、日常的な言語ゲームと教育の言語ゲームとの構造的な差異を明らかにする。「直示的定義」の構造を分析することによって、教育の言語ゲームのなかで言語と事物が担う特別な役割への注目がなされる。

第4章では、子どもに数列や足し算を教える場面をもとに構成された、「ウィトゲンシュタインのパラドクス」の再検討が行われる。クリプキが指摘したこのパラドクスは、従来、教育の原理的な困難性を強調するための素材として、取り上げられてきた。これに対して本章では、ウィトゲンシュタインがこれらの事例にあてた背理法的性格に着目することで、教育を困難に陥れる要因としての消極的な意味での他者性から、教育の積極的な帰結としての他者性へと見方を変更する可能性が提示される。

第5章では、前期および後期ウィトゲンシュタインの自我論を中心に、自我の成立に際して他者の存在と言語が果たす役割と、イニシエーションのプロセスのなかで自我に伝達されうる事柄の解明がなされる。ウィトゲンシュタインの後期哲学に内在する「教える - 学ぶ」という観点のうち、本章では特に、後者の学ぶ者の観点に注目する。それによって、自我の確実性の基盤であると同時に不確実性の源泉でもあるという他者との二重の関係性とともに、「語りえぬもの」の伝達という教育の可能性の一端が明らかにされる。

第6章では、最晩期ウィトゲンシュタインの哲学をてがかりに、「言語の限界」をめぐるウィトゲンシュタインの思考の到達点を確認される。特に、「蝶番命題」と呼ばれる特殊な命題の性質を「教える - 学ぶ」という観点から捉え直し、教育におけるもう一つの倫理のあり方が提示される。

以上のような内容を持つ本研究は、『論理哲学論考』(1922年)の前期哲学から、『哲学探究』(1953年)の後期哲学への転回の意義を、先行研究を丁寧にふまえつつ、ウィトゲンシュタインの議論に内在して明らかにしたものである。特に、後期哲学における言語ゲームのパラドクスを、教育の困難性という従来の視点よりもむしろ、教育の可能性への視点という形で読み直すことで、教育哲学に新たな地平をもたらすことができた功績は大きい。以上により、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。